

在宅医療の現場でも活用される GS1 標準

— 薬を安全に服用するためのさまざまな取り組み —

年々高齢化が進む日本では、これまで以上に在宅医療のニーズが高まっている。在宅医療とは通院や入院ではなく、自宅や高齢者施設などの生活の場に、医師や看護師などの医療従事者が訪問して行う医療のことを指す。住み慣れた自宅で自分らしく過ごせるというメリットがある一方、患者は高齢であることが多く、自宅における薬の管理は困難を極める。そのため、医師の指示通り、患者が安全に薬を服用するためには多くの工夫が求められている。

今回、在宅医療に特化した調剤薬局での GS1 標準の活用を見学する機会を得たので紹介する。

第一薬局浅間通り店

千葉市稲毛区にある第一薬局浅間通り店は利用者の約 99% が在宅医療を受けているため、薬剤師が高齢者施設や個人宅へ訪問し薬を届け、服薬指導、薬の管理等を行っている。

医療従事者によって薬の管理が行われる入院治療と比較し、在宅医療では服薬管理が難しい。特に数種類の薬を処方され、かつ服用タイミン

グが薬ごとに異なる場合は、薬の飲み間違い（例：飲み忘れ、飲み過ぎなど）が起こりやすい。これらを改善するのが一包化^(注)である。

一包化を行うことによって、どのタイミングで何の薬を服用するのかが一目瞭然になるため、患者は指示された用法、用量通り、正確に薬を服用することができる。同店では、応需する処方箋の 9 割以上を一包化している。

(注) 一包化とは、服用のタイミングが同じ数種類の薬を、1 回の服用分ずつ 1 袋にまとめることをいう (図)。

GS1 標準を用いた薬の識別

薬の一包化は自動分包機を用いて行っている (写真 1)。自動分包機

の上部には、錠剤やカプセルの入ったカセットが設置されており、処方データが入力されると、このカセットから医薬品が自動で払い出されるが、専用のカセットがない医薬品が処方された場合は、汎用カセットを使用する。その際、医薬品包装に表示されている



写真 1 自動分包機

GS1 データバーを、バーコードリーダーで読み取って医薬品の照合を行い、充填ミスを防いでいる。

同店では、処方通りに正しく一包化が行われたかを、さらに自動鑑査機を用いて確認している (写真 2)。自動鑑査機の画像認識技術により、錠剤やカプセルが正しく分包されているか判断することができ、もし調剤ミス（例：処方にはない薬が入っている、錠数が正しくない等）があれば画面にエラーが表示される。

鑑査後、分包品が自動鑑査機から排出される際には、患者名、服用日、用法に加えて GS1 データマトリックスが印字されたラベルが、一包ごとに貼付される (写真 3)。

ラベルに印字された GS1 データ

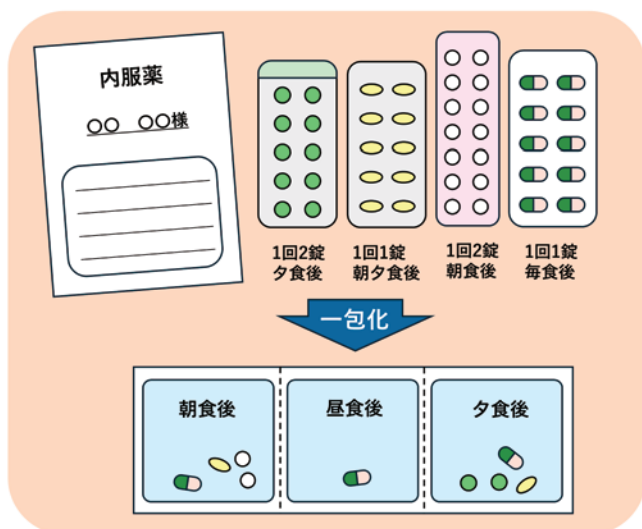


図 一包化について



写真 2 自動鑑査機

マトリックスには、一包ずつを特定するためのコードがエンコードされているが、この一部として GS1 識別コードである GSRN (Global Service Relation Number: サービス提供者識別番号 / サービス受益者識別番号) が用いられている。ラベルの GS1 データマトリックスを、専用のスマートフォンアプリを利用して読み取ると、その一包に入っている薬の薬剤名・数、薬剤画像、服用時点、調剤月を確認をすること

リックスを活用することによって、一包ずつを一意に識別し、薬の内容確認が容易になることは、在宅医療の現場において非常に有用である。

おわりに

2006 年に発出された厚生労働省通知により、医療用医薬品へのバーコード表示が推進されてきたところだが、改正薬機法により 2022 年 12 月以降、表示は義務となった。

義務化の目的として、医薬品取り

ができる。

在宅医療における GS1 の有用性

在宅医療では、薬を一包化し患者に渡した後でも、患者の状態により、医師が「ある特定の薬のみ中止」という指示を出すことは珍しくない。錠剤やカプセル自体に印字されている数字や記号により、対象薬の特定は可能だが、それらは小さく、識別には時間と労力を要する。

GS1 データマト

違い防止およびトレーサビリティの確保があり、医療現場においては医薬品の管理やピッキング、注射薬の混注業務等でもバーコードの利用が広がっている。これらは製薬メーカーによって表示されたバーコードを使用するものであるが、今回紹介した自動鑑査機の事例は、製薬メーカーではなく、調剤薬局において、一包化薬の識別のため、GS1 データマトリックスを表示し、活用するものである。

厚生労働省の令和 2 年(2020 年)患者調査(確定数)の概況によると、在宅医療を受けた推計外来患者総数に、65 歳以上が占める割合は 9 割以上であり、在宅医療での服薬管理は、大きな課題と考えられる。医療用医薬品における管理や調剤にとどまらず、在宅医療の現場におけるさまざまな場面で、今回紹介したような GS1 標準の活用が広がり、医療の安全性がより向上することを期待したい。

(ヘルスケア業界グループ 和田)



写真 3 一包ごとに貼付されるラベルに印刷された GS1 データマトリックス